

英語・中国語・日本語の”face”(面子)の違い

加藤典子*

The Difference of ”Face” in English, Chinese and Japanese

Noriko Kato*

The purpose of this paper is to focus the concept of ”face” regarded as an important concept that controls our daily communication and to clarify the difference of ”face” in English, Chinese and Japanese. The reason why I take up this theme is that I am convinced that making the difference clear is indispensable for preventing, from happening, intercultural miscommunication. As a result of collecting each feature of ”face” in English, Chinese and Japanese, in accordance with Brown and Levinson (1978, 1987) concerning English face, Mao (1994), Chinese face, and Matsumoto (1988) and Ide (1989), Japanese face, the following difference is clarified:

- English face refers to two basic individual wants composed of ”positive face” (one’s desire to be appreciated by others) and ”negative face” (one’s desire to be unimpeded by others).
- Chinese face is closely concerned with social or communal norms, that is, Chinese face is satisfied by acting and speaking in accordance with one’s social norms and conventions.
- Japanese face is also characterized by community-oriented society, and satisfied by discerning the situation, one’s status in their community and the relationship between interlocutors.

As seen in this difference, English face is characterized by individual wants while Chinese and Japanese face, the compliance with the community one belongs to. This difference between English face and Chinese and Japanese ones reflect on the diversity between western individual-oriented society and non-western community-oriented society.

I hope this kind of study contributes to devising more elaborate and comprehensive linguistic theory and promoting smooth intercultural communication.

1. Introduction

1.1. 目的

本稿において、英語と中国語と日本語の”face”(面子)について取り上げる目的は、欧米主導型で且つ普遍的とされている言語理論に対して、中国語や日本語のような非欧米の言語文化圏の観点か

ら、従来の言語理論に欠けているものを補い、貢献する為である。勿論、欧米の理論や英語を基にした理論が、中国語や日本語のような非欧米の言語にあてはまることも多々あるが、やはり細かく観察してみると、そもそも、英語・中国語・日本語で言語の表現形式が違うことからわかるとおり、それぞれの思考習慣や文化も違うわけであるから、欧米の文化や思考習慣を基にして生まれた言語理論にあてはまらない中国語・日本語の言語事象は沢山あるはずである。そのような非欧米か

* 東京工芸大学工学部基礎・教養非常勤講師
2000年9月14日 受理

らの貢献というのが、英語以外に中国語と日本語を取り上げる理由である。

また、ここで、言語事象や言語理論そのものを扱うのではなく、敢えて、"face"(面子)に着目するのは、"face"(日本語で簡単に説明するのであれば、「対面・面目」の意味)というものが、言語を使ってコミュニケーションをとるにあたって、常に気にせざるを得ない重要な要素になっているからである。常に自分や相手の"face"を気に掛けながらコミュニケーションをとるとするのは、どの言語にも見られることであると考えられる。しかしながら、もともとの"face"に対する認識において、欧米と非欧米では既にズレが生じているからこそ、欧米・非欧米間でのコミュニケーションの際に誤解が起きることがしばしばあるのではないだろうか。例えば、一人のアメリカ人が日本のある家族にホームステイに来た場合、その日本人家族はアメリカ人のお客様を手厚くもてなし、毎日色々な所へ観光に連れて行ったりして、事細かに面倒をみるであろう。そうすることこそが、お客様を受け入れた自分達の"face"を保つことであり、丁重にもてなすことにより、アメリカ人のお客様としての"face"も傷つけないで済む事になると、日本人であれば考えるであろう。しかし、これは、そのアメリカ人の観点からすれば、"negative face"(誰にも邪魔されずに一人で居たいという欲求)というものが侵されていることになり、実はかえって迷惑に思われていることがある。簡単に、英語では"face"、日本語・中国語では「面子」というが、やはり、本質的にはその性質が異なっているからこそ、このホームステイの例のような誤解が起きると思われる。このようなコミュニケーションにおける誤解を未然に防ぐ為にも、会話する際の重要な一要素としての"face"に注目することは大きく貢献出来る。

英語と中国語と日本語における"face"は、上記のホームステイの例からしても、各言語文化圏ごとに独自に形成されてきたものと考えの方が妥当であるように思われるが、言語学の流れにおいては、Brown and Levinson (1978), (1987) の論文を発端として、"face"という概念は"positive

face"と"negative face"(この2つの用語については次章にて説明)という2つの面から成っており、それらは普遍的(世界共通)であるとする彼等の仮説が主流になっている。この普遍説に対し、非欧米から数々の反論の論文が書かれているが、ここでは、英語と中国語と日本語の"face"についてコンパクトに比較がなされている Mao(1994)の論文を主として取り上げ、それをもとに、本稿では、更に、3つの言語における"face"の違いを明確にする。これらをより明確にすることは、誤解のないスムーズな異文化間コミュニケーションと、より洗練された言語理論の産出の促進につながるかと確信している。

1.2. 構成

3カ国の"face"の違いを明示するにあたって、本稿では、以下のような構成で論じていく：まず、2章で、英語における"face"の概念がいかんにして確立されたかという過程と、英語の(特に Brown & Levinson の論文で定義付けられている)"face"の特徴についてを述べる。3章では、Mao (1994) を基に、中国語における"face"つまり面子の成立過程と、中国語の面子の特徴を明らかにする。4章では、英語の"face"に対して反論している2つの論文：Matsumoto (1988)と Ide (1989)を紹介することにより、日本語の面子の特徴をまとめる。5章で、欧米生まれの(英語の)"face"と非欧米生まれの(中国語・日本語の)面子という観点から社会性の違いに起因した3カ国の"face"の違いを提示し、6章に結論を書く。

2. 英語の"face"

2.1. 英語の"face"成立過程

英語における"face"について論じた研究の中では、前章でも簡単に紹介したように、アメリカの言語学者 Brown & Levinson (1978, 1987)の論文が最も顕著とされているが、実は彼等は、アメリカの社会学者である Erving Goffman の1967年の論文で提唱された"face"の概念を大いに参考にしている。そして、Brown & Levinson(1978, 1987)の中で展開された「ポライトネス理論(後に

詳しく説明)」という言語理論の中に、Goffman の概念化した”face”を基に彼等独自に発展させた英語話者流”face”というものが登場したのである。

Goffman (1967) によると、”face”とは、「個人が属する社会から、個人へ向けて貸し出された public image である」と定義されている。つまり、彼の定義による”face”とは、社会の中で、個人が担っている役割としての顔・イメージを指しているもので、とても public なものであり、個人個人は常に、自分の社会の中で持たれている自分のイメージにふさわしい言動をとることがのぞましいとされている。例えば、学校の先生であれば、学校の先生という”face”(イメージ)にそうように、また、銀行員であれば、そのイメージにそのような行動をとることを心掛けるというものである。逆に、自分の”face”にふさわしくない言動をとった場合は、”face”を失うということになるわけである。このように、Goffman の仮定するところの”face”とは、自分の属する社会や、周囲の環境や、会話のやりとりの状況において周りから付与されるという大変 public なものであったが、Brown & Levinson の論文の中では、もっと個人的なものとして解釈され、発展させられることになった。

Brown & Levinson (1978, 1987) では、Goffman の”face”の概念を利用して、「ポライトネス理論(円滑なコミュニケーションの為に、話者が相手に心配りを示す丁寧な言語行動に関するルールやストラテジーをまとめたもの)」を展開している。その理論では、”face”が中核を成す概念となっている。何故なら、特に相手を気遣う丁寧さを重んじた会話のやりとりにおいては、相手の”face”を保つことになるか、又は、傷つけたり脅かしたりすることになるかということが、重大な関心事になると彼等は考えているからである。彼等は、通常の会話においても、いつも、人が言葉を使って相手に話しかけるということには、相手の”face”を脅かす可能性・危険性があるとみなしている。このように、相手の”face”を傷つけたり、脅かしたりしないように、人々はどのようにポライトなストラテジーを使って会話のやりとりをする傾向にあるのかということが、彼等の論文にま

とめられているのであるが、その中心概念である”face”を彼等流に定義したものが、現代の言語学において主流な(英語の)”face”として確立された。

2.2. 英語の”face”の特徴

Brown & Levinson は、”face”を以下のように定義した：ポライトネスにおける重要な概念の一つである”face”は2つの構成要素から成っている。それは、「自分のことを相手に良く評価してもらいたい、相手に好意的関心を示してもらいたい、相手に認められたいという願望を表す”positive face”(積極的面子)と、相手に自分の領域を侵害されたくない、相手に指図されずに自由に振る舞いたいという願望を表す”negative face”(消極的面子)」¹⁾である。そして、これら2種類の”face”は、全ての人々が共通に持っている普遍的な願望・欲求であると仮定されている。

では、”Positive face”について説明するために簡単な例を挙げることにしよう。例えば、相手の服装を褒めたり、お世辞を言うなどの言語行為は、褒められたい、良く思われたいという相手の”positive face”という願望・欲求を満たしてあげることになり、同時に、そのような発話をした話者の”positive face”(お世辞等を言って、相手の気分を良くさせることにより、相手から好かれたいという願望)をも満たすことになるわけである。

”Negative face”に関する例としては、ordering(人に命令する)や advising(人にアドバイスする), inviting(人を招待する), offering(何か物を提供する)などの言語行為が挙げられる。このような行為は、相手の、一人にさせてほしいという欲求や、人に邪魔されたくないという欲求である”negative face”を傷つけ脅かすことになり、同時に、それは相手に不快な思いをさせ、自分が嫌われる可能性を孕んでいるわけであるから、命令・アドバイスをした話者の”positive face”も失われることにつながる。

以上から、英語における(Brown & Levinson 流の)”face”の大きな特徴は、大変個人的な欲求であり、また、自分がどのように周囲の人から見られ

たいかという個人的な self image であることがわかる。前のセクションで紹介した Goffman の言うところの「自分が属する社会から付与された public image」という要素は脱落し、各個人が所有している個人的な願望(周囲の人から、このようなイメージで見られたいという願望)として定義付けられているところが、特徴である。

このように、とても個人的な概念として英語の "face" が確立される際には、社会の最小単位は個人であり、会話のやりとりにおいても常に個人の主張に重きを置くという欧米社会の個人主義が前提になっているからではないかという指摘が、Mao (1994), Matsumoto (1988), Ide (1989) 等で成されている。つまり、社会や集団を個人の集合と考えることにより、社会や集団の利益に優先させて個人の意義を認めるという個人主義が欧米社会に根付いているからこそ、英語における "face" は、個人的な欲求・願望に結び付けられるようになったと推測されるわけである。

また、以前の段落でも軽く触れたように、Brown & Levinson は、上述の "positive face" と "negative face" を、人類共通であり、人間なら誰でも持っている根本的な欲求であると、普遍的な概念として主張している。しかしながら、この普遍説に対し、先ほど述べた「個人主義をベースとする社会の中で生まれた "face" の概念」を普遍的なものとして、そのまま、中国語や日本語のように個人主義社会ではない言語文化圏にも適用するのは間違っているという反論も、Mao (1994), Matsumoto (1988), Ide (1989) の論文中で成されている。

では、次章で、Mao (1994) を基に、中国語における面子を紹介し、いかにそれがこの普遍説とは異なるかということを明らかにする。

3. 中国語の面子

3.1. 中国語の面子の成立の背景

現代の中国語における面子の概念の確立については、Mao (1994) と Gu (1990) によると、中国古代の孔子の思想における「礼」を抜きにして語ることは出来ないとされている。故に、以下では孔

子という人物について軽く触れ、孔子によって提唱された「礼」について紹介することにする。

孔子は、紀元前 500 年前後に、儒教という中国古来の政治や道徳学の教えを説き、特に、「礼」というものを、儒教の中でもっとも重要な道徳的観念として位置づけている。「礼」とは大雑把に言えば、儀式・作法・制度・文物等を含む、社会の秩序を保つ為の生活規範のことであり、特に、周王朝の混沌とした社会状況を変え、秩序を取り戻し、社会階層性の理想的な社会へと変革する際に大きな役割を果たした教えであった。つまり、お互いに礼を守ることにより、争い事を無くし、秩序ある社会へと導こうとしたのである。この教えの細かい行動に至るまでの様々な行動規範は、後に、Dai Sheng により編集された「礼記」にまとめられている。

「礼記」に記されている数多くの生活行動規範のうち、現代中国にも根付いている重要且つ根本的とされる礼を以下に 3 つ挙げることにする。

- ① 人々はそれぞれの社会的地位に応じた立場をわきまえ、把握して、社会の階層・秩序を乱してはならない(例えば、自分の身分に応じた言葉遣いをしなければならない)。
- ② 常に、自分を卑下・謙遜して、相手を尊重する。
- ③ 個人や自由というものに重点を置かず、個人は個人の属するグループや共同体に従って行動すべきである。

このような「礼」という古代思想が、現代中国にも十分に残っている為に、中国における面子というものは、個人的なものではなく、自分の属する団体・共同体・社会を最優先し、その社会における自分の役割としての顔を守るというような、社会性に富んだ public な性質を多分に持つようになった。次のセクションでは、中国の面子についてのより詳しい特徴を、Mao (1994) を基にしながらか明示する。

3.2. 中国の面子の特徴

最初に、中国語の面子を表す 2 種類の用語を紹介する(それに際して、Mao (1994) 以外に、Ho

(1975) と Hu (1944) も参考にする)。その2種類とは、“mianzi”と“lian”であり、両方とも英語の face の辞書的な意味と同じように、身体の一部としての顔の意味と、名声・名誉を表す暗示的な意味を持っており、特に後者の意味においては、世間の慣習にかなった評判の良いイメージを指す。“Mianzi”は、“lian”に比べれば個人的なもので、個人が生涯を通じて築き上げていく名声・名誉を表すのに対し、“lian”はとても社会的で、自分の属する共同体から認められているか・信用されているか・どう見られているかといった、より public なイメージを指している。故に、“to lose mianzi”よりも、“to lose lian”の方が深刻な問題となる。つまり、「to lose mianzi」というのは、何か個人的な不運や失敗によって一気に貧乏になり面子がなくなる¹³⁾ という個人的なものであるのに対して、「to lose lian」は、自分の属する共同体に大変迷惑をかけるような不道德なことをして、その共同体から非難され続け、社会的信用を失う¹⁴⁾ 程のものなので、より共同体・社会に密接に関わっているという性質を持っている。

Mao(1994)によれば、これらの用語のどちらにしても、確かなことは、Brown & Levinson の定義したような個人的な欲求や self image とは全く違って、自分の属する共同体の基準・規範の期待に合うような public image を表しているという、非常に社会的なものであることである。このことが第一の大きな特徴である。つまり、個人個人の性格や行動が、属する共同体の基準や判断にいつも従い、恥じないようなものであるというイメージが大切であり、共同体とのハーモニーを重んじるので、社会や共同体と切り離して面子を考えることは不可能なのである。

2つ目の特徴としては、やはり Brown & Levinson の言うところの個人に内在する本能的欲求と言ったような不変的・固定的なものではなく、個人を取り囲む周囲の環境や、属する共同体や、日常の会話のやりとり等から、大変影響を受けやすく、敏感に反応して変化しやすいものであることが挙げられる。

これら2つの特徴をわかりやすく、明確にする

為に、以下に、中国における典型的な inviting(誘い)の例を挙げ、Brown & Levinson の“negative face”と比較してみることにする。Brown & Levinson の“face”の考え方によれば、相手を強引にパーティーに招待したり(inviting)、何か物を提供したり(offering)、することは、招待された側・提供された側にとっては、人から構われたくないという“negative face”を侵害されるということになるので、相手の“face”を脅かす可能性の高い言語行為とされているが、中国における inviting や offering では相手の面子を傷つけることにはならない。それは、上記でまとめた中国語の面子の2つの大きな特徴が作用しているからである。では、以下に、Mao(1994)を参照しつつ、中国の日常会話でよく見られる inviting の例を挙げる：

中国で典型的な招待の会話のパターンというのは、例えば、相手を自分の家へ食事に招待する場合、誘う人はとにかく一生懸命「お願いですから、是非うちへいらして下さい。」と誘い続け、誘われる側は「あなたのお手間をとらせる事になるので申し訳ないです。」等と言って断り続けるものである。この「誘う・遠慮する・誘う・遠慮する」という形式的・儀式的な会話を何回か繰り返してから、もし、その場に仲裁に入るような第三者が居れば、第三者からも「是非食事に行ってみたらどうですか？」というような助け船を差し出されることにより、やっと誘いに応じるというような長いプロセスを経るのが通常である。

この例の最初の方で、誘った側は相手から何度も断られたからと言って、「相手から好意を持たれたわけではないし、また、断られたからと言って、誘われた側の「干渉しないでほしい」という“negative face”を傷つけたことにもならないのである。実は、中国語における招待という場面では、上記のような会話のパターン(誘い続ける・断り続ける)をとることが暗黙の了解になっていて、そのような形式にのっとって招待の会話を進めることが当たり前の規範になっている為に、英語の“face”の観点からすれば、お互いに“face”を失ってしま

いそうに見える上記の会話パターンも、中国のコンテキストにおいては、面子を失う心配は何もないのである。つまり、誘われた側は断ることによって、誘う人から「この人は、共同体の一員として(誘われた場合、最初は断るといふ)規範をきちんと守っている常識的な人だ」と認識され、そのような面子を守ったことになるわけである。逆に、誘われた時に即座に誘いを受け入れてしまう事こそが、礼儀をわきまえていない、卑しい人だと思われることになり、面子を失うことになるのである。また、誘う側も、一度相手に断られたからといってすぐに「ではまた、他の機会にしましょう。」等と言ってあっさり誘うのをやめてしまうと、それは英語の "face" の観点からすると、もう必要以上に相手の "negative face" を傷つけずに済むので望ましいことのように見えるが、中国語会話の場合では、これから更に「誘う・断る」という形式を繰り返して徐々に誘いに応じていこうという心構えでいる相手の意思に背くことになり失礼に値するので、相手の面子を汚すことになるし、また、中国における招待の会話形式にのっとっていないとして、誘う側の面子も失われることになる。しかし、いくら大体のパターンは決まっているからと言っても、誘い方や誘いに対する応じ方によっては、誘う側も誘われる側も、その場その場のやりとりにおいて、面子が高まったり失われたりして常に変動していくので、その場の会話の進行状況に密接に関わった流動的な性質を中国の面子は持っている。

このように、いかに自分の属する社会・共同体の一員として、そこでのルールにのっとった礼儀正しさを持ち、その場における自分の役割・行動をわきまえ、相手を敬うかということが、中国語の面子では大変重要な特徴になっているので、英語の "face" とは概念化も内容も全く異なっているのである。次章で紹介する日本語の面子も、英語の "face" とは全く異なり、どちらかといえば、中国語の面子に類似していると考えられる。

4. 日本語の面子

日本語の面子は、漢字からしても一目瞭然のよ

うに中国語に由来しており、「面目・対面」を意味する。この章では、普遍的とされている Brown & Levinson の英語の "face" の考え方に対して、日本語の観点から異議を唱えた論文の中で、顕著な2つの論文: Matsumoto(1988)と Ide(1989)を4.1で紹介してから、4.2で改めて日本語の面子の特徴を明らかにしていく。

4.1. 日本語からの反論

このセクションで、英語の "face" の概念に対して反論している研究を提示することは、いかに、欧米社会の下で生まれた "face" の概念と、日本の社会・文化の中で生まれた面子が違うかということをもより鮮明にする為にも有益だと思われるので、以下に、日本人の「人間関係重視」の傾向という観点から反駁した Matsumoto (1988)の研究と、日本人の「わきまえ」の観点から反論した Ide(1989)を紹介する。

Brown & Levinson の研究では、"face" の概念は日本語にもあてはまる普遍的なものとされているが、これに対して、Matsumoto (1988)では、「社会の basic unit を個人であるという西欧の前提は、日本の文化・社会にはあてはまらない」^v ので、Brown & Levinson の枠組みでは日本の面子を説明することは出来ないと主張した。つまり、自分の属する共同体の中で与えられた自分のポジション・役割というものを周囲の人達との人間関係においていつも把握・確認し合っていきながら、常に自分の周りの人達と良い人間関係を保っていきたいというように、日本の社会においては、常に、自分と自分の属する共同体のメンバー達との関係を念頭に置いているので、周囲の人達との関係によって形成されていく日本の面子は、個人主義の欧米社会で生まれた、個人の欲求・願望という性質を持つ英語の "face" とは全く性質を異にするというのである。

言語表現との関わりから見ると、social interrelationship に重きを置く日本語だからこそ、日本語には豊富な敬語表現や定型表現(決まり文句)があり、それらをうまく使いこなすことが、より良い人間関係を築いていこうとする、相手や自分

の面子を守る事につながるのである。例えば、初対面の挨拶・自己紹介の時に、「日本人は必ず『宜しくお願いします』という決まり文句を言うが、それを言うことにより、『あなたを尊敬し、頼りにしています』という気持ちがこの言葉で表現されて、より良い人間関係を築いていこうとするお互いの面子が高められたことになるのである」¹⁾と、Matsumoto は説明している。つまり、中国語の場合と似ているが、自分を下げて謙遜し、相手を尊敬することにより、良い人間関係を築き、保ちながら、お互いに頼り合っていることを認め合うことこそが、お互いの面子を高め合うことなのである。このように、相手との関係を最優先するという事と切り離して日本の面子を論じることは出来ないとするのが、Matsumoto の提示した大きな特徴である。

次に、Ide (1989)においても、まず、日本の社会は個人よりもグループ・共同体のメンバーシップに重きを置いているので、欧米社会の個人主義をベースとしている英語の"face"の概念は、日本における面子にはあてはまらないという反論が成されている。グループ・共同体を尊重する日本の社会において大切なことは、常に自分の身分相応の行動・発言・役割・相手との関係を「わきまえる」²⁾ことなのである。故に、個人の欲求・願望を尊重しそれに従ってふるまうことよりも、社会の中における自分の地位や役割をわきまえ、社会の規範・習慣に従いながら、発言・行動することこそが、日本人の面子を満たすことになるのである。「わきまえ」という概念が日本人の根底に常にある為に、いつも social convention に従っていたい、そして、いつも共同体の中の一員として役割を果たしているということを表示・確認し合いたいという願望が生まれ、それが日本人の面子行動をかきたてているのである。

例えば、会社における上司 A と部下 B との会話であれば、部下は「自分は部下である」という地位・役割をしっかりとわきまえた上で、適確な敬語表現を使って上司に話しかけることにより、「A は上司であり、B は部下である」という役割・関係をわきまえているのだというお互いの面子を

満たし保つことが出来るのである。しかし、場面が変われば、つまり、部下 B も会社から家に帰れば、今度は「家庭における一家の主」としてのわきまえを持ち、父としての威厳ある言葉づかいをして一家の主としての面子を家族間で保つことになる。

このように、自分の属する環境における「わきまえ」というものをベースにした日本の面子は、group membership や social hierarchy に重点を置く日本独特の社会にだからこそ根付いた概念なので、個人主義をベースにした欧米社会で生まれた英語の"face"とはどうしても性質が異なる、というのが Ide(1989)の主張である。

4.2. 日本語の面子の特徴

英語の"face"の概念に対する上記の2つの反論からもわかるように、常に共同体における自分と相手の関係を意識して更に良い関係を築いていこうとし、自分の地位・役割をわきまえたやりとりをすることが双方の面子を満たすことになるという事が、日本の面子の大きな特徴である。これは、前章で述べた中国における面子と大変良く似ている。また、特に自分の身分・地位・役割をわきまえるということで特徴づけられる日本の面子は、Goffman の定義した public image(社会から貸し出された自分の身分・役割としての顔・イメージ)としての"face"に似ている。

また、前述の「わきまえ」に良く似ているが(あるいはその中に含まれるものとも考えられるが)、「場にフィットした発話をする」³⁾ことも、お互いの面子を保ち合う為に必要になるということも、日本語の面子の大きな特徴として挙げられるべきであると、私は考える。その場その場にフィットした発話をするということは、例えるならば、冠婚葬祭などのそれぞれの場に適した服を着こなすように、その場にふさわしい発話をするということである。例えば、4.1 で見た上司と部下の例をもう一度取り上げると、その部下も場面が変わって、つまり自分の家に帰れば、今度は「家・家庭・家族」という場に合わせて「一家の主」としての顔を持ち、父として威厳のある言葉遣いに切り換え

て、一家の主としての面子を家族間で保つ必要が出てくるというように、場面において守るべき面子は変わるのである。また、先程の4.1で挙げられていたMatsumoto (1988)の例の「宜しく願います」という決まり文句も、良い人間関係を築く為に「あなたを頼っています」という気持ちを表現して自分の面子を保っているだけでなく、自己紹介という場面では「宜しく願います」という決まり文句を言うことが場から要求されているので、その場面でこの決まり文句を言うことにより、「この人はこの場に適した発言が出来るきちんとした人である」と思われ、面子を保つことにつながるわけである。

以上のように、日本の面子というのは、自分の身分・役割、相手との関係、自分はどのような場・状況にいて、その場において何を言わなければならないのかという、自分の周りにある全ての要素を考慮し、わきまえた上で、やっと保持されるものなのである。

5. "Face"と“面子”の違い

2章から4章までで見てきたとおり、中国語の面子と日本語の面子は大変類似しているが、英語の"face"とは全く質を異にしていることは明らかである。これらの大きな違いは、やはり、前述のように、欧米と非欧米の社会性の違いに起因していると考えるのが妥当である。欧米の個人主義、つまり、社会の基本単位を個人とする社会性の下で生まれた英語の"face"の概念は、個人の権利を第一に尊重して守る社会を反映して、"positive face"(相手から好意をもたれ、褒められたい、認められたいという願望)と、"negative face"(相手から指図されたくない、邪魔されたくないという願望)という2つの個人的願望から成り立っていると仮定されたと考えられる。これに対して、非欧米である中国や日本における"面子"は、社会の最小単位は個人ではなくグループ・共同体であるとする社会性の中で培われてきた為に、「常に共同体に認められるかどうかを意識しながら、共同体の一員としてふさわしい、また、自分の置かれているその状況にもふさわしい言動をとること」と仮

定されるに至ったのである。

より詳しく見る為に、英語の"positive face"・"negative face"を、中国語・日本語の面子と比較してみることにする。まず、相手に認められたい・褒められたいという"positive face"の性質は、中国・日本の面子に全く存在しないわけではない。確かに、相手に認められたい、好意をもたれたいという願望も、中国や日本の面子に含まれてはいるが、最優先されるべきものではなく、あくまでも二次的なものとしてしか存在し得ない。何故なら、中国や日本の社会で最優先されるものは、個人の欲求・願望ではなく、自分の属する共同体であり、その共同体の規範・慣習に従うことであるからである。

この観点からすると、英語の"negative face"は、中国・日本の面子には全く馴染みのない概念ということになる。つまり、相手から邪魔されたくない・周囲の人と関わりたくないという個人的欲求である"negative face"を互いに尊重し合うということは、常に自分が持つべき面子を共同体や話し相手との関係の中で捉えるという中国や日本の社会では大変考えにくいことであるので、中国・日本には"negative face"は存在しないと言っても過言ではないように思える。中国や日本の社会のように自分の周囲の人達、あるいは、何らかの規範・習慣に自分を合わせなければならないということは、英語の"negative face"からしてみれば、周りから干渉されたくないという"negative face"が侵害される行為として見なされてしまうであろうが、実際は決してそうではなく、social conventionsに従うということを苦痛に感じるどころか、従うのが当たり前なので、そのことにより安心感すら感じる程で、面子を傷つけたり脅かしたりすることには全くならない。むしろ、仮に自分の欲求(例えば英語の"negative face")を尊重してそれを満たしたいが為に、social conventionsに反するような行為・発言をすれば、その時こそ、中国・日本の面子を失うことになるのである。

以下では、中国と日本の面子にとって、いかに、英語の"negative face"が縁遠いものであるかを

具体的に見る為に、inviting という言語行為の場面を設定し、inviting における3カ国の面子・face 行動を比較することにより、中国と日本の面子の微妙な違いも含めて観察することにする。

- ・英語の場合の inviting…相手をパーティーなどに招待しようと誘うことは、相手の”negative face”を脅かす可能性が高いことである。招待を受け入れてくれれば何の問題もないが、断られた場合は、誘われた側の「パーティーなどには行かず、もっと他の用事を優先したい。干渉しないでほしい。」という”negative face”を傷つけたことになる。個人の欲求・個人の自由を侵害するかしらないかが、英語の”face”の一番大事な要素である。
- ・中国語の場合の inviting…パーティーに招待しようと誘って断られたからと言って、すぐさま、それが、相手や自分の面子が脅かされることにはならない。中国における典型的な inviting では、相手から誘われたらまず必ず断り、「誘う・断る」という会話をしばらく繰り返してから頃合いを見計らって受け入れるということが習慣になっている為、その習慣・会話形式にのっとった会話をするのが面子を保つことにつながる。このように個人の欲求ではなく、社会規範・習慣に従っているかどうか、中国の面子においては重要な点なのである。
- ・日本語の場合の inviting…せっかくパーティーに招待されたにも関わらずそれを断った場合というのは、誘いを断った側は「誘ってもらったのに、その相手の好意に報いることが出来ず、パーティーに来てほしいという相手の期待にそえなかった。今後、この相手との関係が悪くならどうしよう…」といった感じで面子を失う可能性が高くなる。更に大事なことは、誰が誰を招待するかという相手や、inviting という行為を行う場面が変われば面子の満たし方も変わるということである。仲の良い友達同士の間で行われれば、断る側も断られた側

もさほど面子を失うということはないが、目上の人が目下の人を誘って、目下の人が見断るとすると、それは目下の人が目上の人と今後良い関係を保てるかどうか危うくなっていくという目下の面子を失うことになる。同時に、目上の人も「せっかく誘ってあげたのに断られてしまった。面目がない…」という思いをして、面子を失うことになる。故に上下関係にある場合での inviting では、良い関係を保つ為にも、どんな無理をしてでも都合をつけて招待に応じて、断るとすることは避けて、お互いの面子を守ることを最優先させることが多い。

Inviting の例からもわかるように、まず、中国と日本における面子は”negative face”とは全く関係がないことは明らかである。中国と日本では慣習や場面をわきまえることが面子を守ることであり、日本の場合はそれに加え、常に相手と自分の関係をも意識しているので、相手によって面子行動も変えることが重要になってくる。

欧米との社会性の違いに起因して、中国・日本の面子は、上記のように、英語の”negative face”に縁がなく、それとは全く違った性質を持っているにも関わらず、”positive face”と”negative face”から成る英語の”face”の概念は(多少の文化差はあるものの)普遍的であると主張した Brown & Levinson の研究はあまりにも性急であったと思われる。故に、今後も欧米主導型の理論・概念などを鵜呑みにしないで、よく吟味して、より正しく、より良い理論が生まれるように、非欧米の観点から貢献する必要があるのである。また、”face”と”面子”の概念の欧米と非欧米の違いを明確にし、しっかりと把握しておくことは、欧米と非欧米間での円滑な異文化コミュニケーションの為にも重要なことであるので、今後もこのような研究は更に発展させられるべきものである。

6. Conclusion

本稿では、どの言語においてもコミュニケーションの際に必ず気に掛ける必要のある”face”(面子)という概念に着目し、欧米の社会性をベースに

した英語の"face"の概念と、非欧米の社会性をベースにした中国語・日本語の"面子"の概念は、いかに根本的に質を異にするものであるかを明らかにした。英語の"face"については Brown & Levinson(1978, 1987)を、中国語の面子に関しては Mao(1994)を、日本語の"面子"に関しては Matsumoto(1988)と Ide(1989)を基にそれぞれの特徴をまとめ、英語の"face"は"positive face"(相手に好意をもたれたい・認められたいという欲求)と"negative face"(誰からも邪魔されたくない・干渉されたくないという欲求)という個人的な欲求を尊重した概念であるのに対し、中国語の"面子"は自分の言動が自分の属する共同体の一員としてふさわしく、又、共同体の規範・習慣に従っているかどうかを、周りのメンバーからいかに判断されるかによって左右されるとも社会的な概念であり、日本語の"面子"もそれに大変似ているが、中国語の面子の概念に加えて、会話をする場面や相手と自分との関係を常にわきまえて応じる必要があることが特徴として挙げられる。特に、英語の"face" vs. 中国語・日本語の"面子"という大きな違いが出てきたことには、常に個人というものを尊重する欧米の個人主義という社会性と、グループ・共同体に重点を置いて個人は共同体の規範・習慣に常に従うことが前提とされている非欧米の社会性との相違が深く関与している。このような重大な違いがあるにも関わらず、もし、欧米主導型の流れにのっとなって英語の"face"の定義・仮説をそのまま普遍的なものとして受け入れてしまえば、欧米・非欧米間の異文化コミュニケーションにおける誤解はいつまでたっても解消されないであろう。

ここでは、欧米・非欧米に通じる包括的な新しい"face"の概念を提示するまでには至らなかったが、今後は、本稿で明示された"face"と"面子"の違

いが円滑な異文化コミュニケーションに役立ち、より適切で包括的な言語理論が生ずるきっかけになってくれることを望む。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen Levinson 1978 Universals in language usage: Politeness phenomena. In: Esther N. Goody (ed.) *Questions and politeness: Strategies in social interaction*, 56-289. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mao, LuMing Robert 1994 Beyond politeness theory: 'Face' revisited and renewed. *Journal of Pragmatics* 21: 451-486.
-
- ⁱ Goffman, Irving 1967 *Interaction ritual: Essays in face-to-face behavior*. New York: Pantheon Books の 10 ページを参照。
- ⁱⁱ Brown, Penelope and Stephen Levinson 1987 *Politeness: Some universals in language usage* Cambridge: Cambridge University Press の 61 ページを参照。
- ⁱⁱⁱ Ho, David Yau-fai 1975 On the concept of face. *American Journal of Sociology* 81(4): 867-884 の 871 ページを参照。
- ^{iv} Hu, Hsien Chin 1944 The Chinese concepts of 'face'. *American Anthropologist* 46(1): 45-64 の 45 ページを参照。
- ^v Matsumoto, Yoshiko 1988 Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12(4): 403-426. の 405 ページを参照。
- ^{vi} 同じく, Matsumoto(1988) の 409, 410 ページを参照。
- ^{vii} Ide, Sachiko 1989 Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of Linguistic politeness. *Multilingua* 8(2): 223-248. の 230 ページを参照。
- ^{viii} 日本人の「場」にフィットした会話をするという、「場」を重視する考え方の詳細については、加藤典子 1999「Grice の会話の公理にあてはまらない日本語会話」日本語学会 第 119 回大会 予稿集: 45-50. を参照